

石クリ通信

10月号

九十一歳のピアノリスト

院長 石川 悟

東京に住む牧先生は九十一歳ですが、現役のピアノリストです。先日久しぶりに会い、チェロとピアノの合奏を楽しみました。フォーレの「シチリアーノ」や「コル・ニドライ」の難しいピアノ伴奏を、「この速いパッセージは練習しないとうまく弾けないわね。」とかおっしゃりながら、ほぼ完璧にチェロに合わせられました。昔のこともよく覚えていて、いろいろな話を聞き、あつという間に滞在の時間が過ぎました。

牧先生と出会ったのは、五十年前、私が学生時代です。当時千葉にお住まいだった牧先生が、松本までピアノを教えに来ていました。私の同級生の妹さんがピアノを牧先生に習っていて、とても上手なので大学オーケストラと共演できないか、という提案があり、とんとん拍子に話が進み、定期演奏会でのコンサートが実現しました。その後牧先生のピアノの発表会で、先生にピアノを弾いてもらって、シューベルトの「鱒」の演奏をやる機会もありました。

大学を卒業後に筑波大学病院の外科系レジデントとして勤務を始めると、脳外科の牧教授の奥様が松本でお世話になった牧先生だと知りました。当時は仕事が忙しく、チェロなど弾く時間が取れずにはいましたが、3年目くらいに脳外科の講師でプロ級にヴァイオリンが上手な伴野先生に誘われて、ピアノ・トリオを始めました。レベルの高い2人いろいろな教わりながら、メンデルスゾーンやチャイコフスキーのトリオを大学会館やノバ・ホールで演奏したのは、いい思い出です。

牧先生はお弟子さんとのコンサートを毎年開いて、暗譜で弾いている由。チェロの伴奏なら初見でも大丈夫、と力強い言葉を聞くと、とても九十歳を過ぎていたとは思えません。私が帰る時も、駅まで近道があるから送っていきわよ、と軽快に歩き出しました。最近心筋梗塞や尿管結石の治療をした、とは言っても、ここまで元気なのは、子供の頃からずっとピアノに親しんできたこととお弟子さんたちに囲まれているおかげかなと思います。



恩送り

事務長 石川 都

最近読んだ「老い方、死に方」という養老孟司の対談集で、「里山資本主義」を説く藻谷浩介の話が、とても興味深かった。資本主義とは「資本を循環再生させて利子を得る主義」のことで、それは実はお金の発明以前からあったという。例えば田畑は、開墾という投資で得られた資本から、作物という利子が取れる。原始時代の石器は、砕く磨くという投資で作った道具から、獲物や工作物という利子が得られる。田畑も石器も一度限りのものではなく、手入れして循環再生させれば、利子も継続的に受け取ることができる。

里山とは農村集落の身近にあり、人が手を入れていた山林地のことで、水源や薪木材の供給地として循環再生を繰り返して、こうした自然資本から、利子として水や食料や燃料などが供給できるため、大切にされてきた。

また「ヒト」という資本も、子を生み育てるという投資から「次世代」という利子が得られる。これは換金価値のある労働力にとどまらず、「次世代がいる」という考え方は、自身の子の有無と関係なく、自ら積み上げてきたものを受け継ぎ発展させてくれるという未来への期待ともなる。

里山資本主義では「物々交換」や、自給自足の余りを相互に贈り合う「恩送り」など、お金を介さない繋がりも大事にする。養老の提唱する都会と地方の行き来も、もとは自然を知らない都会の子供への提言だったが、高齢者にとっても、里山地域での五感を使った自給自足に近い暮らしは、金銭に頼らない豊かな老後の示唆となる。里山地域は、高齢者のみの限界集落とみなされることも多いが、実はそこでは皆元気で体を動かしているため、使う医療費も少なく、その予算を若世代の施策に回せるという。

この恩送りという言い方は言い得て妙だが、地方では昔から普通に行われていた。「天下の回り物」とされるお金の代わりに「縁」を順繰りに回してゆく「恩送り」のリバイバルは、超高齢化社会の未来モデルとなるかもしれない。

虫の声

事務 吉田 政子

日が落ちると、虫の声が聞こえてくるようになりました。先日、夜寝ていたら「チッチチッチチッチ・」と同じリズム、結構な音量で繰り返して鳴く虫の声に何度も起こされてしまいました。電気をつけて声の主を探してみますが、気にならず近づくで鳴いてるようには聞こえてきません。気になって眠れなくなってしまうので、夫を巻き込み真夜中の大搜索です。しばらくすると、また同じリズムで鳴き出ししました。目を凝らし、耳を凝らし声の方にそーっと近づくと窓枠に一センチ位の小さな虫を発見しました。こんな小さな虫がああ音量で鳴く？

「カネタタキ」と言う虫でした。秋の虫の声は好きなのですが、真夜中に聴くカネタタキの鳴き声は安眠の邪魔になるので、一晩だけで勘弁してほしいです。

二十四時間テレビ

看護師 太田 小百合

今年の二十四時間テレビで、広島県尾道市に住む一〇三歳の哲代おばあちゃんの話が放送されました。畑仕事をしながら一人暮らしを続ける哲代おばあちゃん。彼女が書いている本の中に「長生きできる八つの習慣」「生き方上手になる五つの心得」「私らしくいるための五カ条」が記載されています。「長生きしてもいいことなうなずいてしまっていました」「長生きしてもいいことないなあ」と思っていたのですが、哲代おばあちゃんの名言やとてもかわいい表現や笑顔に癒され、「彼女のようにな長生きできたらいいなあ」と思ってしまうました。興味のある方はぜひ読んでみて下さい。

二本の杖

看護助手 柴田 さち子

今年三月の始めに、自分の不注意で足を怪我しました。一日：二日：と日が経つにつれ痛みが増し、立つこともできないほどでした。家の中で赤ちゃんのようにはハイハイしていたら、姪が杖を持って来てくれました。二本の杖の支えでようやく歩くことができ、本当に助かりました。この時はクリニクの仕事も休んでしまい、スタッフの皆さんにも迷惑をかけてしまいました。日頃から、足元には注意して生活していたのですが、皆さまでどうぞお氣をつけ下さい。



ダイヤモンドアート

看護師 澤田 彰子

大学生の長女が自動車学校に通うため夏休みを利用して帰省しています。空いた時間で何かしようと、ダイヤモンドアートという小さなビーズを一つ一つ下絵のせて絵を完成させるアートをやっています。次男もハマって二人で頭をくっつけてやっています。私にはあまりにも細かすぎてとても無理でした。教習もアートの順調に終わるように見守りたいと思います。

秋を感じます

事務 森 多加子

十月になり、少しだけ涼げやすくなったような気がしますが、まだ暑い日もあり夏が終わったとは思えません。そんな時、鎌倉に住む姉から長谷寺の写真が送られてきました。可愛らしいお地藏さまと彼岸花です。秋を感じます。

